

キャンパスライフのモビリティを考える

Yuiko Iki / Shoichiro Sato / Keiko Onose Tatsuhana / Chrysoula Panagiotidou

In 2020, the globe became shaken by an abrupt transformation in our experience of time and space due to restrictive measures adopted in order to combat the spread of Covid-19. Online and offline networks and systems changed drastically on institutional and personal levels. For the world of higher education, the concept of the campus was challenged while old educational styles were reappraised. Many discussions have focused on the problems of gathering in classrooms or whether online alternatives adequately meet expectations. Our article below takes into consideration in addition to existing in campus movement to and fro, and contemplates new mixed structure of online and offline education. By decentralising the commuting to school as well as the concept of the classroom from the spatial to the temporal and transferring the weight of education from “attendance” to “mission”, we anticipate a new era of educational curriculums.

コロナパンデミックで一変した「通学」の価値。

コロナパンデミックによって私たちは強制的に行動様式と意識の変容を迫られた。2020年春学期、授業は全てオンラインになり、キャンパスで授業を受けるという当たり前の学校生活は当たり前ではないことに皆気づいた。遠いや混雑も含め慣習として許容してきた「通学」も見直しを迫られている。「モビリティとウィルス」を出発点に、密を避けキャンパスに安全に到着する「通学」方法を交通インフラ領域内で考え始めたが、「通学時間をより価値にする」に議論は進んだ。また授業の目的が「出席すること」になっている等、交通インフラの領域を超える問題があることが見えてきた。問題意識は「密を避ける」から「キャンパスライフをより価値のあるものするには」に向かい、それぞれの授業の意味や目的、単位の考え方、先生も含めた評価の基準という「大学の授業のあるべき姿」というより本質的な問いに発展していった。全ての授業がオンライン開催であった春学期での壮大な実験を経て、授業のあり方の根本を問い直すことが、安全な「通学」を実現すると考えた。

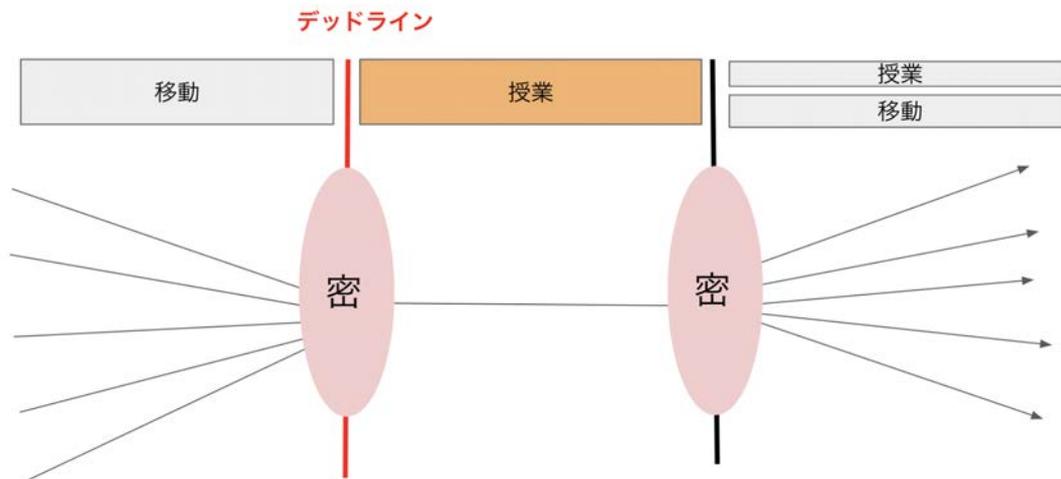
オンラインとオフラインで変わる授業スタイル

強制的に全オンライン授業形式となり浮き彫りになったのは、「湘南台からのバスの混雑」や「教室の密」等、これまでも存在していた負の面だけではなかった。「オンライン開催の方が適した授業があること」、「通学時間を他の時間に当てることで時間が有効に使えること」等オンライン授業の長所も確認できた。そこで授業をタイプ別に分類し、オンライン、オフラインそれぞれにおける長短所を、聞き取り調査も踏まえながら以下の通り整理した。

| | 講義系 | グループワーク系 | 言語系 | ものづくり系 |
|-------|---|--|---|--|
| オフライン | <ul style="list-style-type: none"> ・感染リスク低い ・教室は密状態 ・インタラクシ ョンの確保 | <ul style="list-style-type: none"> ・感染リスク高い ・ディスカッショ ンの体感を得られ る ・グループでの共 同作業の実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・感染リスク高い ・細かい発音やニ ュアンスが伝わる ・体で覚えるが可 能 | <ul style="list-style-type: none"> ・製作物の実物を見る、 触れることが可能 ・学校の施設、 道具の使用可能 ・フィールドワーク・町 歩きの実践 ・グループでの共同作業 の実施 ・体で覚えるが可能 |
| オンライン | <ul style="list-style-type: none"> ・zoomで講義 を聞く形式で問 題なし。 ・オンラインの 方が出席率が上 がった ・一部、集中力 を切らす人も ・チャット機能 でインタラクシ ョンが可能 | <ul style="list-style-type: none"> ・Zoomでのグルー プワーク実施は特 に問題なし。 ・グループワーク メンバーの住んで いる場所や時間帯 による制限が少な く圧倒的に打ち合 わせの時間が確保 しやすい | <ul style="list-style-type: none"> ・zoomでの音の遅 延が気になる ・細かいニュアン スが聞き取れない ・スムーズな会話 が難しい | <ul style="list-style-type: none"> ・実際に物を見ることが できないため、製作物の 詳細や質感等伝わりにく い ・家のスペースや設備で は、ものづくりに限界が ある ・体感の欠如 |

授業をタイプ別に整理することで見えてきた、オンラインの方が良い授業があること、オンライン化の恩恵を維持しながら、メディアセンターやものづくりのための施設・道具の利用、場所の最大限の利用が可能になるような仕組み作りや、オンラインでは難しい授業後の会話の余白や、コミュニケーションの場を確保する工夫が必要であることを踏まえて、私たちは、今後の with コロナ時代に向けて、大学のあるべき姿や設けるべき制度やカリキュラムについて模索することにした。

これまでの通学スタイル



まず、これまでの通学スタイルについて、混雑や密を作り出す要因について考えていきたい。主な要因として、バスのキャパシティが限られていることや、人数が多い授業が1, 2限に集中していることなど挙げられるが、これはコロナ以前からたびたび議論されてきた。しかし私たちは、「移動」と「授業」の境目がはっきりと分かれていることが、混雑や密が発生する根本的要因であると考えた。例えば 13:00 ちょうどに3限が始まるとすると、大勢の生徒が遅刻しまいとその時間を目掛けて移動することになる。そして授業が終わると、また大勢の人が一斉に移動を始める。つまり、「厳密に授業時間を区切ること」自体が、学生の移動における密を作り出しているのだ。

今後の通学スタイル



それでは、with コロナ時代に向けた通学スタイルはどのように変化していくべきだろうか。

私たちが出した結論は「移動のタイミングを分散させる」ことである。つまり、集中的に人が動くという現象を避け学生が流動的に移動できるようにすれば、授業中はもちろん交通機関における混雑も緩和されるだろう。しかし、これを実現するには「授業」の考え方を根本から考え直す必要がある。むしろ、この施策を前提に考えたときに、現状の授業スタイルが抱える様々な問題について向き合うことになった。それでは、これまでの授業の問題点とは何か。コロナパンデミックを機にどう変われば良いのだろうか。次から詳しく説明していく。

「時間浪費」型から「ミッション」型へ

これまでの授業の問題と、今後のシステムについて考察した。まず、分散型の移動スタイルを実現するためには、「時間を過ごせば」単位がもらえるという従来のシステムから逸脱する必要がある。確かに「その場」にいることで教員に質問ができたり、体感を伴うグループワークが行えるなどのメリットはある。しかし、いわゆる「講義型の授業」はオンラインでも問題ないことが分かった。また、課題さえ共有されていれば、リモートでのグループワークや質疑応答も問題ない。ちなみに、これまでの授業では、教室にいながら居眠りをする者、他の作業をする者、友達と喋っている者が人数の多い講義ほど目立っていた。「出席カード」をもらえるか否か論争も全て、「その場」にいることが価値とされてきた結果と言える。しかし、密集がリスクとなった今、もはや「遅刻」という概念すら古いのではないだろうか。その代わり教室で行うことは「リアル」でしか実現できない内容のみとなる。そこで、上記で分類した「講義型」「グループワーク系」「言語系」「ものづくり」がどのように変わっていくのか、考察していきたい。なお、今回はこのように4つの分類を行ったが、もちろん授業によってはハイブリット型とし、オンオフの比重を変えるバリエーションを作ること、密の減少はもちろん、授業の目的の明確化に繋がると考える。

・講義系

講義型とは、教員から生徒へ一方向に情報提供を行うスタイルを指す。基本的にどの授業もこのスタイルを部分的に取り入れているが、大人数の授業ほど講義型の比重は大きくなる。私たちは、今回の聞き取りから講義がメインの授業は引き続きオンライン授業を続けるのが良いだろう。オフラインほどの緊迫感や臨場感は得られないかもしれないが、チャットで気軽に質問できたりアーカイブを残せるなどオンラインでの利点は多い。また、オフラインとオンラインが融合する今後に向けては、「移動時間」に視聴できるコンテンツを増やすことが、通学の分散化に繋がるだろう。例えば、Youtube live などを用いたラジオ形式の授業をライブ配信し、最後にミニクイズなどを行えば生徒の視聴率も確保できる。一方「ミッション型」としてテストを設けたい場合、オンラインテストでのイカサマが心配されるようであれば、教室でのペーパーワークが必要かもしれない。ただし、これはテストの内容によるもので、記述式で自分の意見を述べさせるものであれば、オンラインテストでも問題ないだろう。

・グループワーク系

上記の講義型と一緒にグループワークが行われる授業も多い。グループワークには教室や図書館で数人の学生が集まってアイデアを出し合ったりするものから、実際に外に出て調査するといったフィールドワークも含まれる。今後のグループワークにおいては、実際に会わなければならないものなのか、オンラインで済むものなのかを見極める必要が出てくる。街中や自然で実際に見て聞かなければ分からないものに関しては、十分に感染対策をした上で引き続き外で行う必要があるが、いわゆる資料作りや話し合いで済むものはオンラインの方が日程調整が柔軟に進む。一方、大きく変わるべき点は、教員による講評の時間である。毎回の授業の時間、全員の前で進捗報告やディスカッションを行うスタイルは見直しが必要かもしれない。例えば、90 分間の授業であったら、あらかじめグループごとに教員に合う時間を予約し、15 分ごとに成果物の共有やフィードバックをもらう時間を設ける。そして、グループごとに入れ替わり立ち替わりといったスタイルが考えられる。また、実際に会う必要がないと判断されれば、講評の時間もオンラインで済ませ、その成果と出来栄を評価するのが良いだろう。

・言語系

コロナ禍において、言語の授業が大きな苦戦を強いられたことが今回の聞き取り調査から分かった。言語は、微妙な発音方法やニュアンス、会話のテンポなどオフラインでしか得られない情報が圧倒的に多い。Zoom を用いて言語の授業を行った場合、発音が聞き取りづらかったり会話がスムーズに進まないことが多かったようだ。一方、文法の解説や単語の暗記、ディクテーションなどはオンラインでも可能である。むしろ朝早く起きて学校に行くことが負担となり、それが緩和されたという意味で良かったと感じる人が多いようだ。実際に言語は1限から始まる授業が多く、中には居眠りをする人もいた。では今後はどのようなスタイルに変わるべきか。こちらにも実際に集まらなければならない「会話練習の日」などを設けて、限定的に少数ずつキャンパスに集まる方式が良いだろう。3週間に1回のペースで進捗確認や会話練習、発音のチェックを行い、他のインプット時間は基本的に在宅で行う。そのようにすれば、モチベーションも維持しやすく、適度に仲間とも会え、何より通学のタイミングを分散させるにも効果的だ。特に、他の大型授業がオンラインになった分、通常よりも大きめの教室を使いしっかりと距離をとって会話をすることで、感染リスクも抑えられるだろう。

・ものづくり系

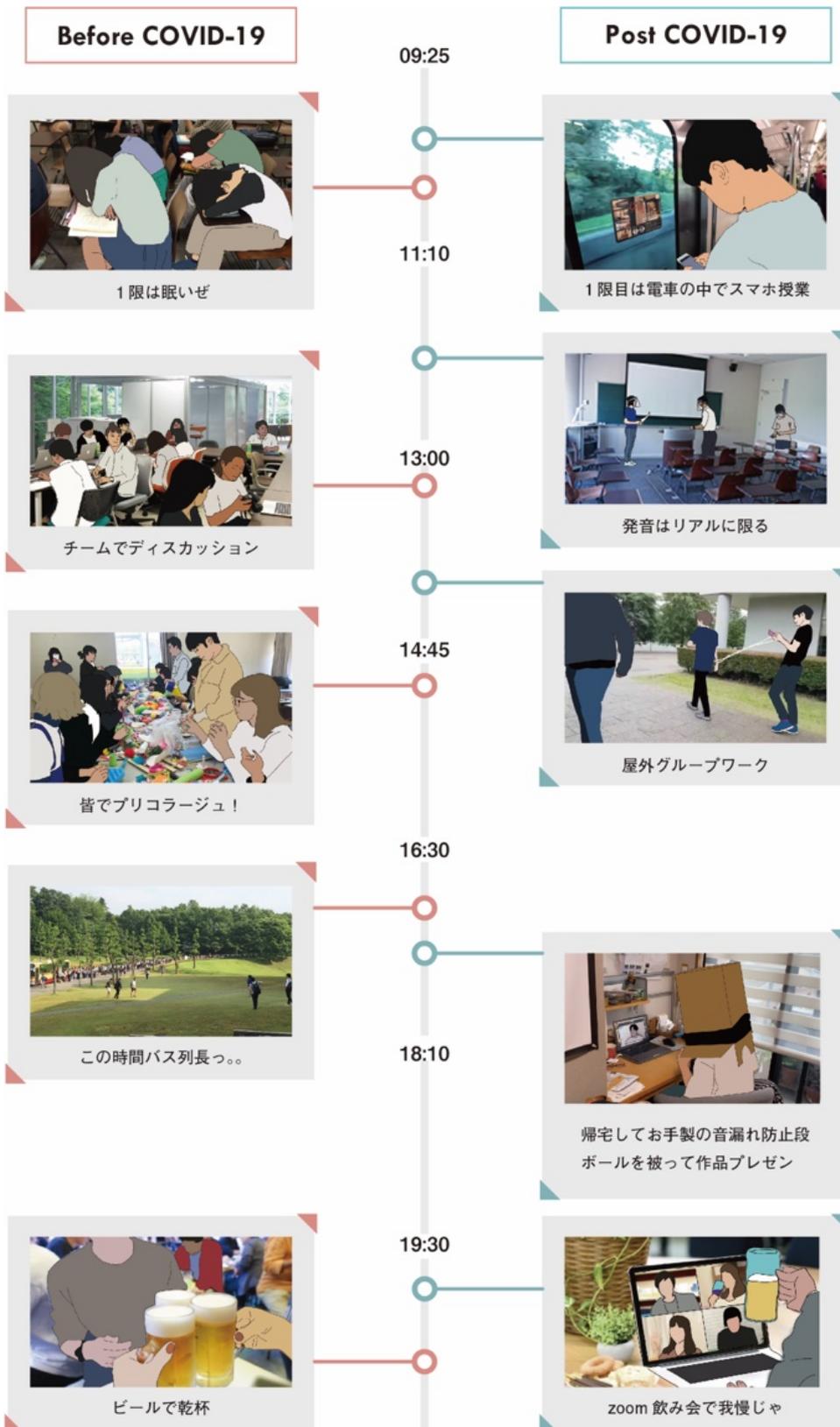
SFC ではものづくり系の授業は多く、建築系から家具など実際にプロダクトを作る物もあれば、高額なソフトを用いた音楽制作や3D モデリングの授業など多岐にわたる。しかし、こういった授業は学校の施設や備品を使用しないと実施は難しく、完成品も実際に見て触れながら講評を行うことが多い。また、こちらにもグループワークとして

制作に望む機会が多く、感染リスクを考えると新たな方式を考える必要がある。まず、ものづくりを行いたい学生にはキャンパスを開放すべきだ。一方、基本的な知識のインプットを行う回はオンラインで行い、それ以外の制作物の講評やグループワークなどはキャンパスで行うことで生徒のモチベーションやものづくりの質も向上するだろう。全体で教員と対面する機会が減る分、個人やグループごとに対面したい時間を設定し、アドバイスやフィードバックをもらう場を設けることで、各々が以前よりも内容の濃い時間を過ごせるかもしれない。講評など人が集まる際にはなるべく大きな教室を確保し、十分な距離を保つことが引き続き必要となる。また、それぞれの作品を一定期間「展示」し、学生が好きな時間に訪れ感想や意見をオンラインで言い合うという形を取れば通学は流動化する。

学生の過ごし方はどのように変容するか

このように、どの授業においてもオフラインとオンラインの融合によって、キャンパスに集う学生を分散させることで感染防止をしつつ、キャンパスを稼働させることができる。むしろ、これによって従来から問題視されてきたバス列や食堂の混雑を緩和できるかもしれない。通学生徒の絶対数が減り、移動のタイミングが分散されればより感染リスクの低いキャンパスライフが実現できると考える。

では、具体的な学生の1日は以前と比べてどのように変化するのだろうか？今回は上記であげた4タイプの授業を全て履修しているA君を例に、コロナ前と比べて今後の1日の過ごし方がどのように変化したか、ダイアグラムを用いて解説していく。



(図1：ある大学生の一日 筆者作成)

おわりに

コロナパンデミックは、従来から問題視されてきたキャンパスの密や混雑の問題の解決のみならず、大学のあり方を、ここに提案する「時間浪費」型から「ミッション」型へと移行させる大きなチャンスと考える。2020年春学期の全授業オンライン実施から見えてきたことを踏まえて、時間と空間の両軸から授業のあるべき姿へと踏み込んで考察した授業のスタイルとキャンパスライフにおける時間の過ごし方の提案が、今後のwithコロナ時代に向けて大学の進化の方向性となることを期待したい。